

三瓶孝子著「日本綿業發達史」

宇野 政雄

一

終戦後の混亂から我國經濟を再建するものとして輸出産業、就中綿織産業が我々の眼前に大きく浮び上つて居る事は言ふ迄もない。而も其の綿織産業中綿業の占むる地位の大なる事は、之亦何人も否定し得ない所であらう。斯の如き重大な使命を有する綿業が、一體我國に於て如何様に發展、發達をなして、今日の如き大工業になつたか、而も其の原因は奈邊にあるのか、斯る綿業の發達史を究明する事は、單に綿業の將來を指示する問題として許りでなく、廣く日本經濟の今後を明示するものとして重要視せらるゝのである。

前述の如く、綿業の、日本經濟に於ける地位の大なるに比例し、其の發達史も亦數多く發表せられて居る事であるが、其の内容を見るに、單なる史實の羅列に過ぎぬもの、興味本位の記事集録に過ぎぬもの多き中にあつて、此處に紹介せんとする三瓶孝子氏著「日本綿業發達史」(昭和二十一年十月、岩崎書店發行)は學問的價值高きものとして、此方面に關心を持つ者の一讀に値ひするものと云へやう。

二

本書の内容は、其の目次に示される如く、

第一篇 日本綿業の發展過程 (一—二七〇頁)

第二篇 機械、原料、労働、資本 (二七一—四六一頁)

第三篇 人造纖維産業の發達 (四六三—五一〇頁)

の三部よりなつて居るが、其の多くの頁が第一篇、第二篇、特に、第一篇に集中せられて居る事は、本書の表題より自ら明かであらう。今、本書の内容を要約すれば、其の「緒言」に述べられる如く、「明治維新、我國産業の黎明期に於ける先覺者の幾多の努力による綿絲紡績業の移植、その爲めに追はれたる農村家内工業たる「手紡」の衰亡、さては在來棉作並びに手織の衰頹、轉化等の變化を觀察しつゝ、我國産業の王者たりし綿絲紡、綿業の誕生より成人になるまでの歴史を研究し、あはせて、日本綿布と、ランカシャー、グリーツとの印度市場をめぐる角逐を通して我國産業の世界的舞臺への發展を顧みる」との旨を言へやう。而も其の中に於て、綿業の發達を單なる經濟の問題として取扱ひばかりでなく、廣く政治、社會の問題と密接に結びつけ、三者の綜合の中に、其の發展の姿を見んとする事、特に「恐慌と戦争が綿業發展に於ける最も大きな契機」である事を中心に、體系的敘述のなされてゐる事が本書の特色と云へやう。

上記の特色は、第一篇「日本綿業の發展過程」に如實に示されて居るのであつて、日清、日露の兩戰役、及歐洲大戰、並に其の間に於ける恐慌を契機として、我國綿業が如何に飛躍的發展をなし遂げたか々極めて明白に示されて居ると云ひ得るのであつて、(第一篇、第三章、四章、五章)以上をや、詳細に述べるならば、次の如く要約し得るのであらう。

在來棉を原料として行はれた洋式紡績業の移植は、外來棉を原料とする大阪紡績會社の設立(明治十六年)を以て劃期的な發展をなした

事であるが、(第一章、第二章、第三章) 其後「明治二十三年の恐慌」を契機として「支那市場へ本邦綿絲の進出」が實現し、ついで「日清戦争」により「機械製絲の發展」、「海外市場への發展」が可能とされ、更に「日清戦争後に於ける本邦綿絲紡績業の躍進的發展」は、明治三十年乃至三十五年に亘る「戦後恐慌」を其の反動として騰らし、この「恐慌による物價の下落は結局市場を擴大せしめ、また大經營による獨占經營の買収合併は生産を有利に轉回して、再び紡績業を發展せしめた」(一六頁)のであつた。斯の如き「恐慌と戦争の契機」は、續く「日露戦争」「戦後恐慌」にも現はれた事であるが、大正時代に於ける「歐洲大戦」を契機として、本邦綿業は過去の日清、日露の兩役に於けるよりも大なる飛躍的發展をなした(一六四頁)のであつた。しかるに歐洲大戦中に於ける好景氣は、周知の如く、實質な生産力の發展に伴ふよりは、むしろ投機的であつたところに既に戦後恐慌が醸されてゐたのであつて、斯の如き「戦後恐慌」に對し、我國綿業は、操短、合理化の二對策を講じた事であるが、それは一方に於て操短を實行しつゝも増強が行はれ、他方に於て優秀紡、機械の採用、工程の改善、設備の改良等々の經營合理化を行つたものであり、此等が我國綿業の生産費を、他國に比較し著しく低下せしめると共に、生産力を向上、發展せしめたものであつて、斯の如き合理的經營が、續く金再禁止後に於ける日本綿布の世界的躍進(第六章)を齎らしたものと云へやう。

以上が、本書の「恐慌と戦争を契機とする」我國綿業發達の大要であるが、著者は更に以上を集約して、本邦綿業が産業上に於て、如何なる地位を占めてきたかを歴史的に考察し、我國綿業を「輸出工業とし、従つて我國の母體産業として重要な地位を占むる」(二二〇頁)も

のと結論せられて居るのである。(第七章)

三

第一篇は綿業發達史の概観を述べたものであるが、第二篇はこれを生産要素別に把握したものであつて、前篇を「總論」と言ひ得るならば、本篇は「各論」とも考へられるものであり、又前篇を綿業の外部より把握したものとすれば、本篇は、その内部より考察せるものと云ひ得やう。いづれにしても、兩篇相俟ち、始めて、我國綿業の發達史が究明し得られると考へるのである。

前述の如く、第二篇に於ては、綿業の内部要素たる「機械、原料、労働、資本」を中心として、歴史的考察がなされて居るのであるが、本篇に於ける特色は、特に緒言に於ても述べられある如く「我國の産業を貿易を今日あらしめた大きな力としての綿業の歴史中一つの大きな力として婦人の存在すること」これが女性の著者をして「綿業の研究に志させた」大きな原因でもあるが、これを強く認識せられて居る事である。即ち、第一章紡、機械、第二章棉花の問題を論じたる後、第三章として紡績労働を取上げ、婦人紡績労働者を「近代的婦人労働者の創始」として考察を進め、我國綿業を今日あらしめた偉大なる彼女等を詳細に觀察せられて居るのである。

更に、第四章に於て「資本」が如何に紡績業に於て集積、集中せられて來たかに對する説明がなされ、第三篇に於て、綿業と極めて密接なる關係を有する「人造纖維産業の發達」を、人絹、スフ兩部門に涉つて究明せられ、最後の「むすび」を以て、本書は終了して居るのである。

以上で、大體、本書の構成を一應、紹介した譯であるが、最後に、

本書を通しての、我國綿業發達に對する筆者感想を一貫、メモ的に説述し、紹介を終りたいと思ふのである。

四

我國綿業の發達は、本書の説明を借りる迄もなく、其の起原を古く天文、文祿年間に求め得るのであつて、其後「徳川時代」に於いて泰平の世が續くに從つて、國民生活の向上、水陸交通の發達、商品經濟の發達……が棉作、綿業を發展せしめたもの（二〇頁）であるが、此の時代に於ける綿業は、在來棉を原料とする手紡、手織の工業であつて、言はば「溫室的發展」をなしたもので言へやう。

然るに、幕末鎖國の夢破つた外國資本主義の怒濤は「貿易」となつて、我國經濟に迫り、其を防禦する意味で、各種産業の近代化がなされた事は周知の通りであるが、特に其の怒濤の當りが強かつたところに「綿業」があり、一早く洋式紡績業の移植が行はれた契機も、此處にあつたと考へられるのであつて、綿業中紡績部門が織布部門に先立ち近代化された理由も、こゝにあると言へやう。

これが、今日の「綿業」を誕生せしめた原因であつて、假りに、當時、斯の如き「貿易」なく、其に伴ふ綿業の近代化がなされなかつたとすれば、恐らく、其後に於ける新業の發展も、發達も不可能であつたに相違ない。今日我々の問題とする「綿業」は、在來の「溫室的發展」の下に育成せられたそれではなく、「怒濤」の中に誕生せる其れである事を考へる時、今日隆々たる「綿業」にとりては、當時の「貿易」こそ感謝すべき存在であつたと言へやう。（勿論、當時の先覺者の努力にも敬意を表すべきであるが。）

斯くの如くして誕生せる「綿業」は、早くも明治二十三年には國內

市場を確保し、一應「怒濤」を堰止め得た事であるが、其後進んで、外國市場に乗り出し、日盛しき發展をなし得た際には、（他に種々なる條件もあらうが）少くとも「綿業」に其の市場を提供せる「貿易」の存在があつた事を銘記せねばなるまい。

前述の如く、今日の綿業發達は、在來綿業の「溫室的發展」の下に生れ出たものではなく、世界經濟との接觸による「貿易」の刺激により誕生し、成人し、發展したものであつて、換言すれば、我國綿業は「貿易」と共に始まり、「貿易」と共に發展し、而も、其の發展が飛躍的であつた事も亦「貿易」の強き刺激に依ると言ひ得るのではなからうか。譯つて、終戦後の今日、我國綿業の將來を考へる時、少くとも、右の事實を其の發展の一前提として、強く印象附けられるのである。

次に、本書に於ては、綿業發展に於ける最も大きな契機として「恐慌」と「戦争」を取上げて居られる事は、繰返す迄もないが、綿業を除く他の産業も、同じく「恐慌」と「戦争」を経過して、發展して來た事を考へる時、特に綿業が、他の産業に比し、飛躍的發展をなし得た事は、以上の様な、外部的問題によつてのみ解決せらるべきでなく、「機械、原料、労働、資本」等々の、綿業内部の問題をも考慮して、始めて解決し得られるであらう事は、前述の通りであるが、而も、兩者の、單なる敘述に依つて得らるべきでない事を考へる時、我々は尙一層の研究をなさねばならない。

以上が、本書讀了後の、我國綿業發達に對する、筆者感想の一端であるが、いづれにしても、本書の如く、材料の豊富にして、而も其の適切なる證據に基く體系的著書は、此の方面に於て稀少とも言ひ得るのであつて、こゝに本書を紹介し、推薦するものである。